

第13回 チーム医療症例検討会 in 西伊豆

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



Download

チーム医療症例検討会 in 西伊豆

2018年6月23日（土）「第13回 チーム医療症例検討会」は西伊豆健育会病院が幹事となり、西伊豆クリスタルビューホテルにて開催されました。今年は各病院・施設から約150名の職員が西伊豆に集いました。

まずはじめに、私から参加している職員に向けて、開会の挨拶として以下の話をしました。



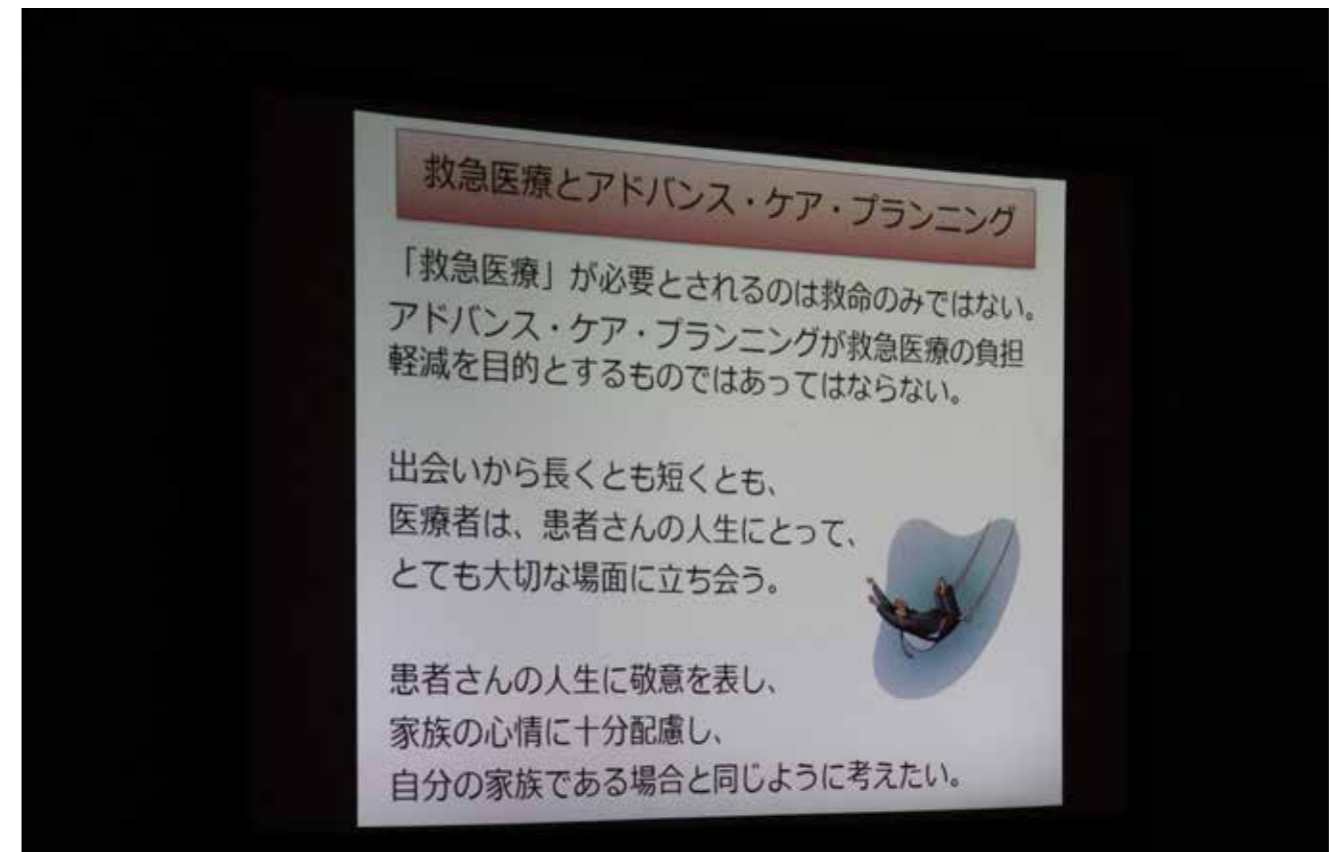
健育会グループのチーム症例検討会も13回目を迎えました。健育会グループの中で、最も歴史ある発表会です。今年は、京都府立医科大学附属病院 太田 凡先生に教育講演を賜った後、症例発表が行われます。介護部門は「キラキラ介護賞」を受賞した症例、病院は「ミラクル賞」を受賞した症例となっており、いずれも私自身が各病院・施設から上がってくる症例の候補をみて、素晴らしいチームワークによって成功した事例であると感じて選出した症例です。

さて現在、日本の平均寿命は世界最高水準になりますが、平均寿命と健康寿命との差が約10年あります。ピンピンコロリと亡くなる方もいらっしゃる一方で、人生の最期を10年以上寝たきりで過ごす方もいらっしゃいます。もしその10年がその人らしい生活ができない状況であるならば、ご本人にとってもご家族にとっても、大変辛いものになってしまうでしょう。そして国にとっても、医療費や介護費が膨大なものになってしまいます。私はこの平均寿命と健康寿命の間に10年もの違いがあるという現状を、国と我々が知恵を出し合って改善していかなければならないと考えています。病院は治療をして、ただ命を長く伸ばすためだけの施設ではありません。治療をし、元気になっていただき、なんとか歩いて自宅に戻れるようにするのが病院です。そしてケアを通じて、その人がその人らしくキラキラとした1日を生きることを支援するのが介護施設です。

それを実現するには、一人の力では限界があります。目の前の患者さん・ご利用者の情報を、関わるスタッフ全員で共有して、その中で自分の役割をしっかりと果たし、チームワークの力を発揮できた時、患者さん・ご利用者はその人の尊厳を取り戻すことができます。今日は、そのような成功事例が19演題発表されます。そのすべての事例において、自分が関わっているというつもりで真剣に聞き、成功例のノウハウを自分のものとして、しっかりと持ち帰って欲しいと思います。



その後、京都府立医科大学附属病院 太田 凡先生に「救急医療とアドバンス・ケア・プランニング」の演題で教育講演を賜りました。



アドバンス・ケア・プランニングとは、「将来の意思決定能力の低下に備えて、将来の医療及びケアについて、患者さんを主体に、そのご家族や近い人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、患者さんの意思決定を支援する過程（プロセス）」のことです。そして、アドバンス・ケア・プランニングにおいては、同意を得ることが重要でなく、時間をかけてでも患者さん・ご家族と一緒にその患者さんの終末期の過ごし方について悩むことが大切とのことでした。

私は以前より、健育会グループに入院する患者さんやご家族に「この病院で看取ってもらいたい」と言っていただけの病院グループになりたいという理想を話してきました。なぜなら、それが究極の信頼関係が築けた証だと考えているからです。アドバンス・ケア・プランニングは、その究極の信頼関係を築くための一つの手法になるのではないかと感じました。

健育会グループの病院・施設においても、医師のリーダーシップの元に多職種が協働し、患者さん一人ひとりの希望に沿った尊厳ある生き方を実現するために、アドバンス・ケア・プランニングをぜひ実践して欲しいと思います。



症例検討会では、「介護の部」10題、「医療の部」9題の全19題が発表されました。



「介護の部」の発表後、座長を務められた元淑徳大学短期大学部 健康福祉学科学科長・特任教授 亀山 幸吉先生から、すべての演題に対して一言ずつ丁寧なコメントをいただいたのち、「本日も、非常に参考になるご発表、そして会場からはご質問ををたくさんいただきました。貴重な機会をありがとうございました。」とのコメントをいただきました。



「医療の部」の座長を務められた西伊豆健育会病院の仲田先生からは、本日の発表の中で学ぶべき点について、「最大のポイントは、4つです。（1）本人の趣味をリハビリに取り込みましょう。（2）声かけ、傾聴、寄り添いは基本中の基本です。近道はありません。（3）点滴はできるだけ早く抜いて、経口摂取に持ち込みましょう。（4）レクリエーションは重要です。レクをなめてはいけません。」とまとめてもらいました。



症例発表の後は、懇親会が行われました。

乾杯のご発声は教育講演を賜った太田 凡先生にいただきました。乾杯のご発声の前には「今日は、チーム症例検討会にお招きいただきまして、本当にありがとうございました。今日は多くの発表を聞かせていただきまして、大変勉強になりました。チームで取り組むことによって、患者さんがハッピーになっていく姿を多く見せていただきました。他の病院が匙を投げたような患者さんについて、健育会グループの病院・施設で幸せになっていく様子を拝見させていただき、すごいなと心から思い、やっぱり医療はチームで行うべきものであるということ、改めて強く感じました。本当に今日は貴重な機会をいただきありがとうございました。」とお話をいただきました。



その後、参加者全員で伊豆の豊かな海の幸を中心とした食事を楽しみました。

また、会場の入り口には西伊豆健育会病院が本年開院30年目を迎えたということで、病院の会員からの歩みや記念ポスターが飾られていました。



会の途中には、西伊豆町長 星野 浄様と、松崎町町長 長嶋 精一様からご挨拶をいただきました。特に星野様からいただいた「どんな深夜であっても、土日であっても、急病になった時には必ず西伊豆健育会病院にまず診ていただけるという安心感が住民の中にあると思います。町としてもできる限りのご支援をさせていただきながら、若者から高齢者まで住み続けられる町づくりを行っていきたく考えています。30年と言わず、40年、50年とこれからも共に歩んでゆければと考えています。今後ともよろしく願いいたします。」とお話を伺いながら、30年前に私が院長としてこの西伊豆健育会病院を開院した当初のことを思い出しました。



西伊豆健育会病院開院のきっかけとなったのは30数年前に、西伊豆地区で大量出血により患者さんが亡くなる事故が起こったことでした。それがきっかけとなり静岡県から西伊豆地区に救急病院を作りたいというお話をいただいたのです。「地元から望まれている場所にぜひ病院を作りたい」と私たち健育会が名乗りをあげましたが、当時の厚生省の課長からは「僻地救急60床、絶対つぶれるので、やめたほうがいい」との忠告を受けたことを、つい昨日のこのように覚えています。しかしそのような当初の予想を覆し、西伊豆健育会病院は地元の応援をいただきながら30年という記念すべき年を迎えることができ、大変嬉しく感じています。

会の後半には地元西伊豆 土肥金山の和太鼓集団による和太鼓の演奏も披露されました。会場いっぱいに広がる力強い音色に会場にいる参加者全員が魅了されました。



会の終わりには、西伊豆健育会病院の院長 仲田先生から、来年の幹事であるねりま健育会病院 酒向先生に恒例の鍵の受け渡しが行われ、今年のチーム医療症例検討会は終了いたしました。



今回のチーム医療症例検討会では、これまでで最大数の19題もの演題が発表され、グループの規模の広がりを感じました。また、発表者も医師2名をはじめとして、看護師、介護福祉士、介護職員、介護支援専門員、理学療法士、言語聴覚士と非常に幅広い職種になっており、それぞれの病院・施設において職員が専門スキルを発揮して、多職種の協働のチーム医療が行われ、患者さん・ご利用者の尊厳を尊重した治療・ケアが実現できていることの表れだと改めて感じました。

グループでこのように大勢の人が集って行う学び合いは、健育会の文化とも言えるでしょう。参加した職員は、自分の働く病院・施設で今回の学びをしっかりと他の職員に伝え、日々の取り組みの中に活かしてください。それがグループ全体の質を高めることにつながります。

来年の幹事は、ねりま健育会病院が担当します。来年は、すべての発表に映像を取り入れることになっています。より発表に臨場感を感じられるようになるでしょう。来年はさらにグループ全体の進化を感じる発表が行われることを期待しています。